

一線記者 **オンライン** 放談会 は「交代」と「抗体」 「ロナ時代」の幕開け

出席者

- A = 全国紙デスク
- B = 地方紙経済部記者
- C = 地方放送局デスク
- D = 週刊誌フリー記者
- 司会 = 本誌編集部

新型コロナウイルスによって人類は危機のただ中にある。政治や経済、社会生活はパンデミックの行方に左右されている。それだけに予測は難しいが、あえて読み解くならキーワードは「交代」と「抗体」になるのか。奇しくも読み方は同じ「こうたい」。普段は決して交わることのない言葉が、2

コロナ禍の収束が見通せない中、2021年を迎える。新たな年、世界はどう動くのか。グローバル化によって、影響は日本、そして北海道にも及ぶ。

2021年はウイルスと共存しなければならぬ「ウイズコロナ」時代の幕開けである。2020年を振り返りながら、混沌とする世界、日本、そして北海道の「明日」を、マスコミで活躍する一線記者の4人にオンラインで話し合ってもらった。
(文中敬称略、12月1日現在)

米大統領交代が始まる21年

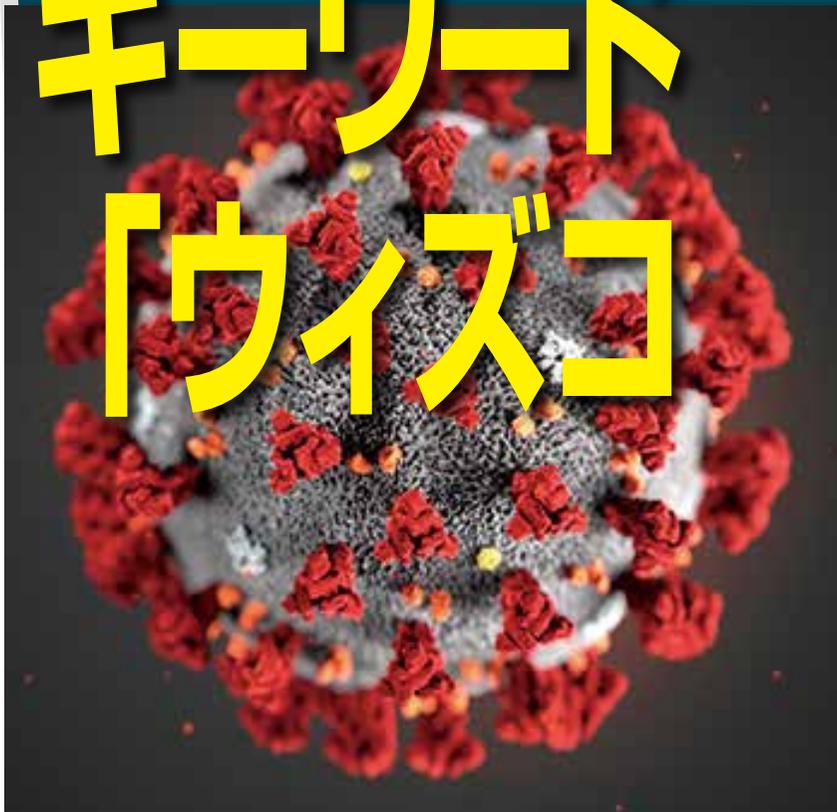
021年に限ってコロナで絡み合う。

たとえば、「交代」だ。米国では4年間、独りよがりの言行で国際社会を振り回してきたトランプ氏が大統領選の最終盤、コロナに感染。バイデン氏に競り負ける要因となった。ウイルスが政権交代を促したとも映る。

新大統領の誕生は米国が自国第一主義から国際協調主義へ転換することを目指す。関税戦争の挙げ句「新冷戦」と呼ばれるまで険悪化した米中対立はどんな展開をたどるのか。それは地政学的にも両国の狭間にある日本の将来に直結する。

一方、コロナを抑え込む「抗体」をつくるワクチンの開発は大詰めだ。

特集 マスコミ キーワード 「ウイズコ



ワクチンなしにかつての日常は取り戻せない。しかし接種時期や免疫効果によっては個人レベ

ルの格差ばかりでなく、国家間の格差・分断がさらに広がりかねない。逆にウイルスという「共通

の敵」に各国がスクラムを組むことができれば、新たな国際秩序を生み出す可能性も出て来る。

米国新政権で日本は負担増も

——では、まず「交代」という切り口で世界の動きを予想しよう。最大の

交代はトランプからバイデンに大統領が代わる米国だ。世界に与える影響

は。A バイデンはオバマ政権の副大統領だったから、



▲トランプからバイデンへ (TV画面より)

外交方針はオバマ同様、同盟国重視の協調路線とみていい。各種交渉はトランプ流のデイル（取り引き）から協議中心となる。だから、世界経済に影響が大きい米中協議もこれまでの制裁合戦のような脅し合いから様変わりするはずだ。

中国に対しては強硬だ。トランプが推し進めた対中シフトは変わらないだろう。

C バイデンは菅義偉首相との電話会談で自分から尖閣問題を持ち出し、日米安保条約の適用範囲と言ったという。尖閣諸島には最近、中国の公船がひっきりなしに姿を見させているから、日本政府の一部には「これで中国も下手に動けなくなつた」と歓迎する声がある。

A その考えは甘い。バイデン政権は中国に対して国際包囲網を敷くのが基本だ。場合によっては日本にも負担増を強いる可能性もある。尖閣で力を貸す代



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)